

本願の宗教

—和讃の諸問題—

金子 大榮

今日は、本願の宗教という題にしておきましょう。そして、昨日も申しましたように、一つの和讃について、一題づつみていこうというのであります。それで、「尊者阿難座よりたち」から「聖道権仮の方便に」というところまで二十二首の『大経』の和讃、その和讃を貫ぬいておるものは、要するに「本願」、如来の本願というものを明らかにしようということであるとみてよからうと思っております。本願ということは「讀阿弥陀仏偈和讃」にどれだけありましたかな。「安楽仏土の依正は 法藏願力のなせるなり」と、あそこに「願力」が一つ出てきております。

七宝樹林くくにみつ

光耀たがいにかがやけり

華菓枝葉またおなじ

本願功德聚を帰命せよ

と、あそこにも本願が出ております。それから昨日話しました「真無量」のところ、「神力本願及満足 明了堅固究竟願」。あそこに「本願」という言葉が二番目に出ておりますけれども、神力というのだけは、如来の威神力であって、あと堅固、明了、究竟、みな本願であります。堅固願、究竟願。浄土というものは、本願成就の世界であるとい

うことが明らかになつとるわけなんでありますが、その本願というものを説いたものは『大無量寿經』であります。そこで「本願の宗教」という題を出してみたのでありますが、だいたいの宗教という言葉は、教えを宗とするということである。或るいは、宗とする教えがあるということである。ということであるとするならば、そういうことを、殊に明らかにしたのが親鸞聖人の『教行信証』でなかるうかと思つております。昨日は、仏教は自覚から出発するといふものがあるといふことを申しましたんですが、自覚からでない、他に教えられるという教。教を中心とするといふことは、自覚というものに先立って、教えがあるということです。けれども、多くの諸宗の書物を読んでみましても、それははつきりせず、また七高僧のものを見ましても、昨日例に出しました、天親菩薩でも、「世尊我一心に」といふことから出ております。何らかの意味において、自覚から出発しておりますが、『教行信証』だけは、「真実の教といふは」といふ。先ず「教巻」といふのがあって、行といふも、信といふも、証といふも、みな教から出ておるのであるといふ点において、特に注意してよいと思つております。教えといふものがまずあるのであると。まず教えがあるといふところから出ておるのであります。

そこで、真宗学といふのは一体何をやるのであるかといふことであります。昨日ちよつと口に出たのでありますけれども、やめてしまつたんですが、まあ今日一つ話してみたいと思つておきますことは、近ごろ大谷派宗門では、親鸞教学であつて清沢教学である筈がないんであるといふことを言おうとしております。これも何故そういうことを言わなければならなくなつたかといふ事情はよくわかるんでありますが、しかし、この学校のことにはまずといふと、建学の精神といふようなことになるかと清沢先生が出てきます。清沢先生によつて、ある意味において方向転換が出来たといつてもいいんであります。けれども、大学では、我々は清沢教学とは決して言うておらない。ですから清沢教学でないといふやうな何かこう宗教上のことがらと、それから清沢先生の教えを尊ぶといふことと、別に矛盾するわけはありませんけれども、ただそういうふうなことを使うことについては、何かこう、いらんことを考えるものだとい

うことを思うのであります。清沢教学でないということはよくわかる。けれども清沢先生の教学は何でしたかと。清沢教学というと何か清沢というものがあって教えを立てられたようでありますけれども、そうでない。清沢師その人は真宗教学で、真宗の教えというものはこういうものである、宗教というのはこういうものである、ということ言うところである。親鸞教学というものがありませんから、そうしますと道元の教学があったり、日蓮の教学があったりするんですよ。親鸞教学というようなのは、もう一つ言えば、親鸞聖人その人の教学は何であったか。親鸞聖人に對して、あなたの教学は何でしたかと言え、わしの教えというのは、『大無量寿経』である。学というのは七高僧の、七高僧流に学ぶのである。「大聖の真言、大祖の解釈」という言葉がありました、お釈迦様のお言葉、それが教えである。大祖、七高僧の解釈、解釈は方法ですからね。学問の対象は『大無量寿経』であり、その方法は七高僧である。教は『大経』、まあ『觀経』『阿弥陀経』、いろいろ撰めることになるんですよが、教とは『大無量寿経』である。学とは、難易二道があるとか、自力他力があるとかというふうな、そういう考え方というものは七高僧にあるのである。こう言ってよいわけなので、そうでなければならぬわけなのであります。そこへきますと然らばその『大無量寿経』とは何ぞやというところへもう一つくるわけであります。そこで『大無量寿経』というものがあるといいますことになるというと、『大無量寿経』だけが仏教でない筈である。『華嚴経』もあれば『法華経』もあるというふうな、そういうふうなことを並べたてようとする。まあ学者というものは、そんなことより仕事がないんだから止むを得んかも知れませんがね。しかし、『無量寿経』、特に『大無量寿経』と言ひ表わそうとした気持ちにはね、そんなことじゃないんでしょう。それで、本当の経というのは無字の経、字に書いたものでなくて、字に書かれんところに無字の経というものがあつたわけである。無字の経という言葉は、どこで覚えたかということ、これは『華嚴経』などを読んでいましてね、本来は無字の経なんです。このお経は、須弥山をみんな砕いて、そしてそれを筆にして、大海の水を墨にして、そして書いても書き尽くせないという。要するに書けないということでしょう。そうすると、つ

まり、見るもの聞くもの、大自然じねんの道理であるということなんでしよう。要するに、この経に説こうとするものは、人間が考えたようなものではなくして、本当の大自然じねんの道理を説き表わそうとしたものであるということでしょう。そうすると、自然の道理というものは、字に書けないんですから、これは無字の経にちがいない。『西遊記』という小説がありますね。孫悟空が玄奘三蔵にお供していくあの小説、あの小説の終わりにいって、そうしていると無字の経が出てきますね。まあ遠いところを旅行して、そして天竺へ行つて、印度へ行つて、「お経をいただきに来ました」と。「そうか」ということで、お経をたくさんもらったが、開いてみると何も書いてない。「それが読めないのか。それじゃ止むを得ない。」ということ、字に書いた経典を、これならば結構だともらってきた。そういう小説がありませんわね。非常に味わいの多いこととしますのであります。大体人間の身というのは無字なんです。この天地自然の道理を見ながらですね、そうしてこうあるべきであるところ、紙に書いてあるようなものに捕えられておつてはもうすでに本当の『大経』ではないんでしよう。だからまあ多くの経典がある。私は『華嚴経』を習つておる。『華嚴経』と『大無量寿経』というものは、何かその点において類似しておつて、本来は無字の経典である。その本来は無字の経典であるが、しかし字で表わさなければわからないはずはないんですから。だから本来は不思議なんであるけれども、それを思議の形で表わし、本来は言葉や文字でないものであるけれども、それを文字で表わし、言葉で表わしたものであるから、我々は文字を通して、そして文字を越えたものを見なければならぬ。言語を通して言語を越えたものを身につけていかなきゃならぬ。それが『大無量寿経』というものであるということでありましょう。しかしそういうふうなことを言うのは金子自身の勝手じゃないかと言われれば、そうすれば和讃を讀みましよう。

そして、

尊者阿難座よりたち

世尊の威光を瞻仰し

生希有心とおどろかし

未曾見とぞあやししみし

と言われます出世本懐であります、その出世本懐というものは一体何を意味するのでありましょうか。出世本懐ということとは、出世の意味ということでしょうな。出世本懐ということは、何かこうお釈迦様がこの経を説くためにということ、出世本懐は『大無量寿経』か『法華経』かと。天台宗が『法華経』に依って、この経が出世本懐であると、こう言いました。それに対していや本當の出世本懐は浄土の經典でなくてはならんと。こういうふうです、もう出世本懐という問題が出ると、すぐ天台宗が出世本懐なのか、というふうなことを論ずることになります。それもそれで決してナンセンスじゃないんですけれどもね。何か我が宗賢しということになるようであります。そういうことでない。本懐とは、出世の意味如何ということである。言い換えれば我々が釈迦というものをもっている意味は何処に有るか。我々が仏教徒と名告りをあげ、そして釈迦というものを拜まがぐゆえんは何処にあるのであるか。決して偉人崇拜でもなければ、そういうものでなくて、そこに釈迦出世の意義、すなわち仏法というものは、いったいどういうものであるかということの本當に表わすものが、そういうのが『大無量寿経』であるということによってですね、『無量寿経』を読むことを得て、そこに釈迦出世の意義というものを感ずるのであります。ですから初めの方の和讃をそのつもりで読んでいきますとね、

大寂定にいらたまい

如来の光顔たえにして

阿難の恵見をみそなわし

問斯恵義とほめたまう

と。あのへんは、釈尊の出世とそれから阿難の問いということが出ていますけれども、それが、

如来興世の本意には

本願真実ひらきてぞ

難値難見とときたま

猶靈瑞華としめしける

と。そこで、難値難見、値いがたく見がたい。難値難見という言葉、値いがたいということは、ただ一度ということでしょうね。めったにない。ただ一度。あるいは、ただ信ずる。あいがたいということは、「遇いがたくして今遇うことを得たり。」ということですよ。遇うたということは、信ずるということであると、何かのお聖教にもありましたな。だから、難値ということ、ただ信ずるより他ないのである。というところに、そこに難値難見と説き、靈瑞華の如しとこう言われているところに出世の意味というものが、そして、ただこのこと一つということが出ておるわけでありませう。

それから、

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも

久しき仏とみえたまう

南無不可思議光仏

饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ

本願選択撰取る

という和讃が出てきます。あれは結局この經典は無字の經典であると、言い換えれば無字の經典であるということを言い表わそうとするものであると考えることは出来ないでしょうか。「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」と和讃の一番最初にそう述べてあります。あれは『大無量寿経』にそう言うてあります。阿難がお釈迦様に向って、法蔵菩薩の願というものはもう出来て、もう成仏して、もうこと終って、もう涅槃に居られるところの過去の仏でありますか、それともまだ修行中で未来の仏でありますか、あるいは今現に仏でありますかと問います。これは、不思議な問い、まあ不思議な問いでありますけれども、これはお釈迦様によせて、考えたんであります。それに対して、もう成仏して今に十劫をへておられるのであるとこう御経に書いてありますから、「讚阿弥陀仏偈和讃」では御経の言葉通りに「弥陀成仏のこのかたは 今に十劫をへたまえり」と和讃されたのでありましょう。ところが大経の和讃にいきました「十劫とときたれど」と。説いてあるけれども、よくよく御経を読んでもみると「塵点久遠劫よりも 久しき仏とみえたまう」。遠い遠い、こういうゆる久遠古成の仏であるように思われると。思わしたものは何でしょう。思わすものは何でしょうということとは昔からの学者たちも苦労されておりますが、まあ誰にとっても分かりますのは五十三仏でしょうね。「乃往過去、久遠無量不可思議無央数劫に、錠光如来、世に出でたまえり」と。それから、その次、その次、その次に五十三仏ならべてあります。あの次々という言葉、一番昔は錠光如来であって、その次には光遠、その次には月光があって、最後の如来が世自在王如来であった。そういうことですから我々に一番近いのが世自在王如来、遠いのが錠光如来とこういうふうに読まれるし、読んで来るのが常識のように思われます。ところが、その經典の文法がわからないので、ある御経によりますと、ある御経というのは確か今の梵本の『無量寿経』、これらで見ますというのと、この次ということとは、事前ということだそうであります。今から昔へさかのぼる。そうしますと、錠光如来というのは一番近いんだよね。我々に一番近いのが錠光如来である。そして世自在王と

いうのは一番古い仏であるということになる。今の梵本から訳した人もそういうふうに翻訳していますから、經典の文章におけるその次その次というのは、もう一つ前は、もう一つ前はということであると領解するのが正しいのかも知れません。『華嚴經』にもその例がありまして、『華嚴經』にもその次ということは、その前ということにしてあります。どちらから数えるのが本当かな。反省の順序で考えるのが本当か。仏教の歴史観などでも、そこに一つの違いがあると思うであります。仏教の歴史というものは、原始仏教というようなことを言って、そうやってその次に大乘教があり、その次に浄土教がある。こう言わんならんのか。それとも我等に与えられた一番近いものは浄土教であり、その次に大乘教があつて、その次に原始仏教があつてと、この方が歴史の逆観といえますけれども、逆観が果して逆観であるか。逆観か、順観か。それとも順逆無碍であるのか。鏡光如来という仏さまは他にも説いてあります。その鏡光如来という仏さまに、お釈迦様は宿世において出遇われたというようなことが言うてありますからね。そうしますと鏡光如来という仏さまは、お釈迦様に近い如来で、お釈迦様はまず鏡光如来の事を思い出して、そして、その鏡光如来に先立って、こういう仏があつたんだと、こう言われたようにも思います。しかし鏡光という字を見ますとね、あれは、灯やらの火というような字であります。はじめに光ありと。その光は本当に灯に点火したような光であつて、ほのかに光に現われた。いずれまた後に繰り返さなくてはなりません。無明の暗夜をあわれみて、法身の光輪きわもなく」というような和讃がありますね。ああいう和讃を觀すると、どう思いますか。「無明の暗夜をあわれみて 法身の光輪」、そうすると、光は闇と共にありきと、そういう感じがするんであります。光と言えど闇が無いというように思いますが、そうでない。遠い昔のことを思うと全く無明の暗夜であるが、そこに一点の光が現われた。だから人間が地上生活を始めたその遠い昔、そして闇から闇をたどるような人間の運命であつたのであるけれども、一点の光が現われた。名付けて鏡光如来と言う。それから光遠如来。五十三仏の名前など見ると何か夜の光というようなものが多いように思いますな。だいたい仏教の經典というのは、何でも名前が付いて、そして名前とい

うものも時によっては、出まかせでないかと思うことも多いですね。『阿弥陀経』でも東方世界はこう、南方世界はこうと言って、仏様の名前が出てくるんですがなあ。そうすると、西方の世界には無量寿仏があったんではないかな。ということは、阿弥陀仏が阿弥陀仏のことを讃嘆なさるということになる。いや讃嘆される方の阿弥陀仏と讃嘆する方の阿弥陀仏は違うんだと、まあいろんなことに苦勞しなくてはならない。けれども何かこう出まかせ……、出まかせでもいいんです。出まかせが出来るということは、何かなけりゃ出まかせは出来ませんから。けれども、その中において本当に筋の通ったものがありまして、五十三仏の名前をあげますと、確かに久遠古成ということを感じさせます。遠い昔から光は光を受けて、だんだん光が明らかになってきてというふうな感じを与えます。ですから「塵点久遠劫よりも 久しき仏と見えたまう」と。これは、憬興の『述文贄』でありますかね。法蔵菩薩の本願というのは、世自在王仏の時になされたと言っておりますけれども、鏡光如来のその時からもう修行が始まっておったんであると、憬興は言うているのであります。そうしますと阿弥陀如来というも、実は本来久遠古成の仏であると見えたまう。そうすると、そこに南無不可思議光仏が出て来て、南無不可思議光仏、すなわち法蔵菩薩であります。法蔵菩薩と言わずに南無不可思議光仏と。

南無不可思議光仏

饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ

本願選択撰取る

そうすると法蔵菩薩が南無不可思議光仏であるということを考えてさしつかえないんじゃないでしょうかね。法蔵菩薩というものについての考えは、優れた思想が曾我先生にありまして、あれは全くまねの出来ないものです。聞いておるといって、ただそれを聞き入って、そして、そうでありますかと申し上げるしかないんです。学んで出

来ないものは、あまりまねをしない方がいいんであります。ただ、南無不可思議光仏とこう言うてある感じからしますと、まず最初に念仏ありき。お釈迦様の前に本願、釈迦の教えの前に本願があったんである。本願の前に念仏があったんであると。そうすると、まず最初に宗教感情というものが有り、その自然、大自然に対する人間の在り方としてですね、最初にあったものが畏敬感情というものである。すなわち南無阿彌陀仏ということであったのである。南無阿彌陀仏というものが親鸞聖人によって説かれたとか、法然上人によって説かれたとか言いますが、まあそれは、そうなんでしょう。形からいえばそうにちがいないけれども、しかし一体宗教とは何ぞやとこう問われて、あれこれと言っても始まらないのです。宗教と本来宗教心というものがある。宗教心というものは人間が地上生活を始めた時からの在り方なんであって、そのあるべき在り方というものを示したものが南無不可思議光仏であるということです。今称えれば、今のものに違いないけれども常に本来的であるということをおうとすることが、

南無不可思議光仏

饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ

本願選択撰取る

というふうな言葉で出て来ています。選択というと、たくさんの中からこれということでありませう。けれども、それは自ずからなるものであって、その原始精神に、原始的な南無不可思議光仏の念仏の心に見出されたものが、それが選択の本願、すなわち阿彌陀の本願でなくてはならないということでありませう。結局私の言いたい処に持って行きますというところ、この経は、すなわち無字の經典であるということではなくてはならないのでありませう。だから無字の經典なるが故に經典に頼ってはならない。しかしながら、その經典を捨ててはならない。頼って、ここにあるから、あそこにあるから、ということをおうとするのは、すでに経意に違うのでありませう。經典を拝読してそこに真

実の道というものを尋ねていかなければならない。そして、道と言うものはそういうものなんでしょう。清沢教学なんて言うから非清沢教学が出てくる。親鸞教学と言うから道元教学が出てくる。そうすると結局、一宗一派に片寄ると言うことになってくるんです。一宗一派に片寄るといことは、ようするに我見ということになる。わが考え賢しということになってくるんですよ。わが考え賢しということ捨てて、そしてここに本当の道が有るんだと言うことを表わそうとするのが『教行信証』であります。そして、今の『大経』の和讃では初めからずっと「難値難見と説きたまへ 靈瑞華と述べたまう」とこう言って、塵点久遠劫より久しき仏であると、こういうふうにして、そして、それから、

無碍光仏のひかりには

清淨歡喜知恵光

その徳不可思議にして

十方諸有を利益せり

と、そこに仏の光というものが出来て来るのであります。この和讃の順序もね、先程申しました「諸経和讃」の

無明の大夜をあわれみて

法身の光輪きわもなく

無碍光仏と示してぞ

安養界に影現する

という感じを「大経の和讃」に持って来ますというのと、だいたい「諸経和讃」というのは、『大経』の精神をもう一つ諸経によって明らかにしようとするものであるに違いありません。ですから塵点久遠劫よりも久しき仏とは、無明の大夜をあわれみてそしてこの光あらわれたりということである。なんにも分かっておらない。それを仏教では

根本無明と言う。根本無明とは枝葉の无明と違うのでありまして、私たちは愚かだと思っ
ていますけれどもね、しかし愚かであると言っているもう一つ元に愚かさというものがあ
って、相対的なものではないんでしょう。ものを知っているものに対して自分は愚か
であるというような愚かでない、ものを知つとると思つていても実は何も知らない
んだという、その無明の闇、闇の夜という言葉が適切に感じられることが、おあり
になるでしょう。あなた方どうですか。全く闇の夜。しかしその闇の夜に光あり。光
は闇と共にありきとでも言いたいようなのが、それが「無明の
夜をあわれみて 法身の光輪きわもなく 無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する」と
いわれることでしょう。そこに無碍の光というものが出て来た。碍りなき光とい
うのは、闇に碍げられない光である。闇を破り通して知らしめるところのその光
です。あの和讃では、ただ「無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する」と名前
だけを挙げてありますが、ここでは、「無碍光仏のひかりには 清浄歓喜智慧光
その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり」ということで、その無碍の光に清
浄・歓喜・智慧という働きがあると表わされます。そして、その働きを背景として、

至心信樂欲生と

十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして

眞実報土の因とする

という和讃が出てきたのである。こういきますと、自ずからなる順序がありまして、
いつも申しますように、謳う人の自ずからなる感情の順序でありまして、我々が今考
えてこの次にはこれを言おうというような順序と違うのを、そこで感ずることが出
来るのでありましょう。

さて、それからずっと出てくるのは三願三機三往生のことです。十八願につきま
しては、

至心信樂欲生と

十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして

眞実報土の因とする

眞実信心うるひとは

すなわち定聚のかずにいる

不退のくらいにいりぬれば

かならず滅度にいたらしむ

と。それから、

弥陀の大悲ふかければ

仏智の不思議をあらはして

変成男子の願をたて

女人成仏ちかいたり

と。こんなふうには第十八願の事を述べる。それから「至心・発願・欲生と 十方衆生を方便し」と、十九の願と二十の願、三願・三機・三往生の、眞宗教学としてはいつも出て来るところの、そして最も大事な事が和讃には出て来ております。したがって、その事をお話するとすると「大経和讃」だけで、二十回も申さなくてはならんですが、それはまあ『教行信証』として説かれており、眞宗の教学として諸君は学んだことなので、だいたい分かっていることにおきましような。十九の願は至心・発願・欲生であるし、二十の願は回向・欲生である。そして両方共、十九・二十は方便の本願である。十九の願に依って諸善万行ことごとく往生浄土の方便の行となる。二十の願によつて、教えざれども自然に眞如の門に転入することが出来る、ということである。ただここで二、三、考えておき

たいことは、『教行信証』では、はっきりと三願・三機とこう言って、そして『観経』の意、『阿弥陀経』の意と言つて「化身土巻」がそのために別開されております。しかし和讃では大経の意の中に説いてあります。もちろん『教行信証』は『大経』の意ですよ。ですから、真実方便と分けてありますけれども、題は『顕浄土真実教行証文類』でありまして、「化身土巻」の終わりにも、そう書いてあります。ただあそこで、真実の教というものを掲げられたからして、そこで方便の教というものは必要が有って、『教行信証』ではそういうふうな教えというものを明らかにされたんです。そして、ここでは至心・信樂というも、至心・発願というも、十九の願というも、二十の願というも、要するに『大経』の意であるということになって、そして『観経』の和讃にいくというと、何もそういうことを言っていない。それが、『教行信証』によって和讃を見るということも大事であります。同時に和讃によって『教行信証』の意を知っていくということも大事なんであって、三願三機三往生とこう分けてはおつても、もう少し大きな目から見れば根本の至心信樂の願というものがあって、そこへの方便として十九・二十の願が出て来たんであると。方便ということとは、それを手がかりとしてということでしょう。方便という言葉に対する解釈は色々あるのです。したがって昔の講者達も色々苦勞していらっしやいますが、しかし私達に与えられます方便という言葉は、言い換えれば親切ということ。まあ、そうでなければ分からないということである。それでないとわからないということがそれが方便ということでありまして、したがって定散二善というようなものがなければ、本願の御意がわからないというような意味に違いない。しかし方便であるから、それに捉われてはならないということでしょう。だから方便ということとは、例えば、御内仏を開いて、そしてそこにある繪像、木像、つまりあれは一つの方便でしょう。ああいうふうな繪像、木像にしなければ我々に仏様というものは分からない。けれども繪像、木像そのものは仏様じゃない。それは分かりきっていることあります。けれども、あれでなければ仏様というものは、どんなものであるかということとは分からない。そういう点におきまして、余乗の教えは皆方便であるということも言いうるでしょう。その親切に

よって初めて本当の事が分かるんだということですから、定散二善は方便であるというふうなことがあっても、にわかにはだすね、だから定散二善はつまらないものであるというふうに考えてはならない。定散二善に捉えられてはならないことは言うまでもないけれども、つまらんものであるという事を考えてはならない。それに依って、その御方便というものによって初めて御眞実まことというものを知らせて頂くことが出来たということでありませう。ですから方便というものが、眞実あっての方便というものであって、そして方便というものが有って始めて眞実というのは了解されるのであるということで、一応、三願三機三往生と分けてみましたものの、その根本の精神から言えば唯一つであるということをお知らせしなければならぬ。そういうような意味におきまして『教行信証』では分けてありますのですけれども、和讃では同じ大經の意として十九の願も二十の願も述べてあるということをお一つ忘れてはならないのであります。さて、その定散二善というのは何であるか、あるいはその定散自力の心を離れない称名念仏とはいったい何であるかということの問題になるんでありますよ。で、ここで何か宗学的なものを話してみたいのであります。まあ必要があればあとどこかで話すことにします。話し始めますというと、先程申しましたように、その事だけで五回も六回も話さなくてはならぬから、まあ諸君の方で研究してもらおうということにしまして、今まで私がたどって来たその心持ちで定散二善というものと自力の念仏とは、どういふものであるかということをお、やや側面觀的にありますけれども話してみたいと思ひます。

これは、『高僧和讃』へいっても繰り返し何遍も話さなくてはならぬのでありますよ。私には、現代の教界を見まして、そこに教養か信仰かという問題があるように思ひます。教養としての宗教。今は識者が皆『歎異抄』を読みますが、同じ『歎異抄』でも、坊さんが説く『歎異抄』と、識者が考ふる『歎異抄』というものと何処か違ひはしませんかなあ。あるいはそうでなくても、生き方のうえに、教養か信心かというそういうものが宗教論者のうえにあるのであります。教養という立場になりますというと、親鸞がこう言つた、道元がこう言つたと、諸善万行が皆出て

来てね、そしてそれによって宗教心というものを明らかにしようとする傾向であります。決して非難することは出来なと思います。清沢満之先生などでも、「私は、信心か学問かということになれば、どちらかといえば学問の方をとりましょう」と言っておられますからね。何故ならば、「信心に頑固な人というものは困ったもんでして」と言うておられますが、そういうふうなことはありません。信心に頑固な人というのは、御自分ではそういうことは分らんかも知らんけれども、何かどこかに頑迷なところがありますね。そこへゆきますと、どの宗旨の話でも結構な話は結構ですと言ってゆく方は、何か豊かなものがあるようであります。定散二善というものも、定は、どう思うたらいいかということに収まるでしょう。散は、どうしたらいいかということに極まるでしょう。それから、定は自然と哲学的になり、散は**自ずから**道德的になる。それで、思想的な考えから、あるいは道德的な考えから、そこで宗教というものを考えてゆくというのが、それが浄土教になりますと、そういうふうに思ったら浄土に往けるか、どういうことをしたならば浄土に往けるかという定散二善となってくるのは当然のことであると言っているではありませんかね。ところが、念仏ひとつである、あるいは、信心より他に何も無いんであるとそう言うたのは、そうでないとは決して言えない。そうでないと決断して言えないのであります。しかし、そうであるということによって、そうでないものを批判したりしてね、あれは無信仰であるとか、あれは念仏を称えないから駄目だとかいうことを言うていいものかどうかであるか。そこに、専修念仏でただ念仏していると言っているその中に狭いものがあり、頑固なものからそれを信ずるより他にないのであるだろうということであるのならば、そこに二十の願というものの有り難さがある、そうなんだそれを徹底するがいい、それを徹底してゆくとときに、そこに念仏というものも、弥陀の名号の他に、仏の名の他にはないということにもなって来るということでありましょうし、本願の真実の他に信心というものはないということになるであろう。昔の人は、そういう時になると、大分言い表し方のうえに苦勞をしておられま

す。例えば、ある講者はこういうことを言うておられます。「疑い晴れて信ずるにあらず。晴れざるは凡夫の心なればなり。」というようなことを言うております。あるいは、本願を信ずるにあらず。本願を信ずるといふことで、本願プラス信心じゃない。本願に信があるのであって、信は本願のうえにあるのである。というふうな点を明らかにしなければ、二十の願というものが分からないでしょう。だから、そこへいくともう一遍繰り返し返しましょうというところで、「如来の興世にあいがたく 諸仏の経道きぎがたし 菩薩の勝法きくことも 無量劫にもまれらなり」「善知識にあうことも おしうることもまたかたし」と、また結びで難値難見が説いてあります。

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

と、あそこに自然の浄土という言葉が出て来ます。自然の浄土という言葉の中には、自然はすなわち浄土という意味もあるのではないであろうか。無限なるもの、本当に無限なるものというのを、我々は何処で感ずるかといえは、結局、自然ということのうえに感じられるのではないであろうか。しかしながら、そこにある問題は昨日一応申し上げましたし、また必要があれば何遍も話さなくてはなりません。しかして、その自然しぜんというものこそ実は、西洋の考え方から言えば、人間に征服されるものであって、だからキリスト教の神学では、自然を勝敗するのは客観主義であり、人間を尊ぶのはいわゆる主観主義であって、その主客を超越して神の世界というものがなくてはならぬというようなことを言おうとするのであります。そこには色々な問題が出て来ます。けれども、その自然という言葉については西洋の学者も色々苦勞をしています。我々が自然と言うとる自然じゃなしに、その自然じぜんをして自然じぜんたらしめるものは何なのか。そこに何か不可称・不可説・不可思議なるものを我々は見ていかななくてはならぬということも言おうとしてお

ります。自然の浄土という言葉も、これも課題にしておきましょう。そして、

聖道権仮の方便に

衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

非願の一乗帰命せよ

と、そこに本願の御心というものを述べてあるのであります。これまで話しまして、一番大事な本願とは何ぞやというのを、どうしても言わなきゃならんものがあるようですね。

至心信楽欲生と

十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして

眞実報土の因とする

と書いてあります。それは、一番最初の序講の時に申しておりました。言葉というものは何であるかということを書いて合わせてもらわなきゃならんのであります。本願は、仏の心を表した言葉である。南無阿弥陀仏というのが最初の宗教感情でありましょうが、その宗教感情のもっている内容を言葉で表わすときに、「至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚」ということになるのである。ということでは、「大経和讃」の中心は、結局あの一首に収まるようであります。まあ、予定より一回延びますけれども、忘れなければ、また次にそのことを話すことにしましょう。

そしてもう一つ、「大経和讃」で考えておかなくてはならんことは、女人成仏のことです。女人成仏というようなことは、『教行信証』には出ておりません。他にも出ておらんと思うのであります。それで、「大経和讃」にどうして女人成仏の考えを出されたのであろうか。住田智見師の和讃の解釈などを見ましても、「大経和讃」において、和讃

と『教行信証』とを対比して、彼にあって此になきものを、此にあって彼になきものを数え挙げてありますが、その第一に挙げてありますのは女人成仏ということです。女人成仏というようなことを言おうとするのが「三帖和讃」である。善導大師のところにも一つありますね。五つの障を離れなくては女人は仏に成らないということが、善導大師のところにもあったでしょう。女人成仏ということがどうして問題になったか。そして、それが何かこう真宗というものを顕す。真宗というものを顕すためには、どうしても女人成仏ということを考えておかなくてはならないものがあるのではないかしらと思うのであります。それにしても、変成男子とか、あるいは女人成仏というようなことは、どういう意味なのであるか。これを広く申しますというと、仏教の女性観というものにも問題が出て来るのであります。仏教の女性観ということについては、随分と考えたこともあるし、今でも色んなことを思うのであります。だいたい、女人というものは男の邪魔になるものだというのが原始仏教でしょうね。『阿含』等の經典では、女人というものは近づいてはならぬものと。蓮如上人の御文などに出ておるような女人観はですね、五障三従とて男に勝つて罪が深い者とか、在家の尼女房たらん者というふうですね。だいたい『阿含』等の經典を読んでみますと、随分ひどいことを言うてあります。そうすると、男尊女卑でありまして、男は仏に成るけれども、女は仏に成るということも考えられないのが、それが原始的精神でありましょう。ところが大乘の經典になりますとそうでなくて、いわゆる男女同格ですね。男だ女だと言って区別する必要が一体何処にあるのであるか。でも男尊女卑の感じは残っておりあります。その証拠は、女だって菩提心があつて修行すれば男である。男だって菩提心がなければ女であるというふうにあります。そのはたらきのないものを女と名付け、そのはたらきのあるものを男とするのであるから、感じとしては男尊女卑が残っているようですが、実際は男女同格であるという。道元禪師の『正法眼蔵』等を読んでみると、それははっきり出ております。いわゆる大乘の經典は、そういうことを言おうとしておるようでありまして。

もう一つ考えられますことは、さらに進んで言えば、女でなきゃならないものというようなものもあるのではない

か。男子より優れておるとは言わなくとも、同じものであるということではなくて、女子は女子であるということにおいてもう一つ意味を有つのだというふうなことを説こうとするものが、あるいは浄土教でないかとも思うのであります。經典を読んでみますとね、娘さんと奥様とお母さんが出て来るのでありますが、娘として出て来る女性は、大乘仏教では男勝りであります。奥さんとして出て来る女性があり、お母さんとして出て来る女性がある。それらのことを思い合わせて、そして、「大経の和讃」において女人成仏というものが出て来たということも一つ課題としていいと思うのであります。これは忘れなければ、善導大師の時に出来来ますから、話すことにします。もう一度本願のことを説明しなくてはならんとすれば、その時に話すことにしまして、今日は何やら話が前後したようですが、今日の講義はこれで終ることにいたしましょう。

（本稿は、昭和四十五年五月十二日の大谷大学における講義、「和讃の諸問題」の筆録である。文責編集部）